有島武郎研究

―著作集第八、九輯『或る女』をめぐって―

宮野光男

一

有島武郎著作集を、それに掲げられているエピグラフとの関係において考察する試みも、第八、九輯『或る女』〔大8・3、6〕を取り上げる時がきたようである。

かつて「或る女」を取り上げたときには、主としてキーワード抽出・分析法によって、葉子像の特色についていささか言及し、あるいは、キリスト教との関わりにおいて葉子像の解明を試みた。その結果、明らかになった葉子像が、エピグラフとして掲げられているホイットマン詩〈To a Common Prostitute〉と内容において響き合っているのではないかという、一種の仮説を立てたのであるが、本論の試みは、ホイットマン詩の解釈を通して、その仮説を実証し、さらに「或る女」本文の解釈にいかなる可能性を見出すことができるかを考察することにある。

そのために、まずは、その仮説を確認しておかなくてはならない。本来ならば、葉子像の全体を明らかにして述べなくてはならないのであるが、紙幅の関係で、結論の部分だけを取り上げるが、第一に、葉子の〈罪の女〉性が問題になるところである。

このような、葉子の、いわば罪の女であることを告発されることへの期待というものは、もち論、有島の『或る女』の創作の基本的意図に関わりがあることは云うまでもないことであろう。エピグラフに引用されているホイットマンの詩“To a Common Prostitute”がそのことを端的に示していると思われるのである。この詩の〈Prostitute〉が、罪の女の具体的な顕現である娼婦性との関わりにおいて象徴的に表現されているだけではない。彼女が、実は「ヨハネによる福音書」第八章に描かれている姦淫の女のイメージに基づいて形象化された女性像であるという意味において、有島がかつて〈Ego〉と名付けた姦婬の女と、直接関わりを持った存在であることを知ることができるのである。[註1]

このなかで、〈prostitute〉が聖書の〈姦淫の女〉と関係があるという論は、後に述べる武田勝彦氏の指摘の援用であるが、この確認こそが、有島の描く女性像と、ホイットマンの詩に描かれている

〈prostitute〉とが、その内面において深く関わりあっているものであることを明らかにするためのポイントなのである。

つぎに有島のいう罪の女とは、自己認識において否定的な存在であると同時に、新しい愛の論理によって生かされることを根源的な願いとして持っている女性、つまり、〈poetic woman〉としての新しい女性となることを憧憬している存在の謂であることは、すでに述べてきたところであるが、〈prostitute〉の、有島の描く女性像との等質性の証明は、〈poetic woman〉が、有島の云うようにマグダラのマリアであるとするならば、「聖餐」（大8・10）[註2]におけるマグダラのマリアもまた、葉子の血脈を引く存在として位置付けることも可能になることを、エピグラフは物語っていることになるという指摘[註3]を実証することになるのである。

また、葉子の、罪の女としての自覚がもし有るとするならば、それは、具体的な顕現として、葉子の内田への期待のなかに見ることができるのではないか、という指摘をしたが[註4]、この問題は、第四十九章末尾の内田待望というかたちで描かれているのであるが、葉子の罪の女としての自覚に対して、いったい、だれが、イエスのような存在であり得るのかということが問われるところなのである。

エピグラフに掲げられている“To a Common Prostitute”において、〈prostitute〉に、〈我が娘よ〉と呼びかけている〈ワルト・ホイットマン〉という存在は、有島にとって、直接的に意味を持った存在なのであろうか。この問いに対して、エピグラフ詩解釈に期待することができるものは何であろうか。エピグラフからは省略されている部分であるが、〈ホイットマン〉に、ホイットマンを越えた存在を見ようとする有島の期待には、内田のモデルであるところの内村鑑三との、有島の側にずいぶん引きつけられた、期待をこめた関係として位置付けることの可能性をも、見出すことができるのではないかという期待もあるのである。

二

落着いて――私に対しては、寛ろいでおいで――私はワルト・ホイットマン、自然があるやうに自由で快活だ、
太陽があなたを見放なさない中は、私もあなたを見放しにはしない、
水があなたのために輝くのを拒み、而して木の葉があなたのためにひらめくのを拒まない間は、私の言葉もあなたのために輝きひらめくことを拒みはしない。

我が娘よ、私はあなたと一つの約束をしよう――而して私はあなたが私に会ふことの出来るだけの準備をするやうに命じよう、而して私が来るまでにあなたが忍耐強く、而して完全になつてゐるやうに命じよう。
それまで、あなたが私を忘れぬやうに、私は意味ある眼つきであなたに挨拶を送る。

有島訳「名もない淫売婦に」の全文である。

有島は、この詩を、エッセイ「ホイットマンに就いて」〔大10・3〕の中で、ホイットマンの特色である〈愛〉を説明するために引

いていることはすでに指摘したところである。[註5] たしかに、これまでに述べてきたように、「あなたに」〈To You〉〔有島武郎著作集第一輯『死』のエピグラフ〕から始まる一連のホイットマン詩は、有島の云うように、「草の葉」全巻に満ちあふれている愛の詩の一部分なのであるが、その代表的な詩ともいうべきこの娼婦への呼びかけの詩は、「ホイットマンに就いて」における〈愛〉論の序詩として掲げられている「あなたに」とともに、有島自身の愛の思いを語って余りあるものと云うことができるのである。

そのホイットマン詩に共通していることは、人間存在に対する全面的な受容の姿勢である。いかなる状況にあっても、だれであっても、ごく自然に、全面的に無条件に受け入れようとする姿勢、なかでも、否定的な存在に対するその姿勢は顕著である。ホイットマンの〈健全性〉を云うところで取り上げられている、〈私は堕落してゆく人を捕へる、而して無敵の意志を以て彼を引き上げる〉〔「ぼく自身の歌」(40)〕や、〈淫欲と邪悪とを私は退けない、／私は犯罪者と共にあつて燃えるやうな愛を覚える、／私はその仲間だと私は感ずる――私自身が罪囚であり漁淫であるからだ。／而して私はこれから彼等を退けることをしまい――私は如何して自分自身を退け得ようぞ〉〔「法廷で裁きを受ける君ら大罪人よ」〕などは、『カインの末裔』のエピグラフ「天然に帰る瞬間よ」の一節とともに、有島の目指す〈愛〉の姿を全的に表現しているということができよう。あるいは、そのような詩を有島が好んで取り上げていると云ったほうが適当であるのかもわからない。

*

「名もない淫売婦に」に対する一般的な評価は歴史的に幾多の消長があったようである。

〈発表当時もっとも論議を呼び、また不評判だった作品〉[註6]ともいわれているが、とりあげられている素材からして、そのことは当然のことであろう。有島が伝えている、当時の詩集自体に対する扱いかた――『クロイツェルソナタ』とともに、いかがわしい書物と一緒に置かれていたという〔「ホイットマンの一断面」(大2・6)〕――からしてもその間の事情はおおよそ察しがつくのである。

鈴木鎮平氏は、

有島は「かくて彼の愛は生活のあらゆる方面に拡がつて行つた。彼は一人の娼妓に向つてかう歌ひかける」と述べて、ホイットマン詩「名もない淫売婦へ」を訳出紹介している。この詩はボストン検事局から猥褻詩と裁定されたものであるが、一八六〇年初出時には「アダムの子ら」詩群には属しておらず、一五篇からなる「使者の葉」Messenger Leaves 詩群の一篇だった。そして、これら一五篇のすべてが"To―"というタイトルに象徴されるように挨拶の詩であって、したがってこの「名もない淫売婦へ」は、タイトルが示す印象とはちがって、性愛詩とは言えないものである。アレンはこの詩を、「救世主のような役割」を果たす顕著なものと解釈し、一八八一年版の刊行を請負ったオズグッドは、この詩を「ある名もない娼婦に捧げるオード」[註7]と呼んでいたもので、人道愛ともいうべき主題の詩であった。

と述べているが、ホイットマン理解が進むにつれて、この詩が積極的な評価をもって受け入れられて行くようすが伺われるところである。

有島が、この詩をエピグラフとして、どのような意図をもって取り上げているかについては、あまり多くの意見は無いが、亀井俊介氏は、〈有島は葉子の娼婦性に注目してこの詩を引用したのではあるまい。むしろこれは、社会に斥けられ自己にそむかれた人間への愛の言葉として引用したものであろう〉[註8]と、葉子の内面性の問題と〈娼婦性〉との関わりについては否定的な立場のようである。

このような状況のなかで、はやくからエピグラフにうたわれている〈娼婦性〉とが、微妙に響き合っていることを指摘している、菊池重三郎氏の、

「太陽があなたを見放さない中は、私もあなたを見放しにはしない」だの、「水があなたのために輝くのを拒み、木の葉があなたのためにひらめくのを拒まない間は、私の言葉もあなたのために輝きひらめくことを拒みはしない」だのと、世にも素晴らしい甘い愛の囁きとばかり思った詩の一節が、実は賤しい娼婦に与へられた言葉だったと知った読者、また、愛憎、嫉妬、物欲など、人間の醜い半面を徹底的に葉子を通して刳り出し、その心理を充分首肯し得る現実性をもって遺憾なく描破して見せるには、それだけの暗い情熱、黒血を内部に感じ持ってゐる人でなければならないことに思ひついた読者、これらの「ファン」がこの作品をむしろ嫌悪し、この作者から離れていったことは当然であらう。[註9]

という言葉は、示唆に富んでいる。

＊

この詩のなかに、人間の罪に対する救いの可能性を見るためには、ホイットマン自身がなぜ、彼の詩のなかで、娼婦を好んでその素材として取り上げているのか、その積極的な意味は何であるかを考えなくてはならない。あくまでも反聖書的な〈好色〉漢であったのか、それとも、それは、意図された、一つの表現であったのか、という問題なのである。

そして、例えば、うたわれている〈見捨てられた女性―その内面に真実の女性性を秘めている―〉の救いを、ホイットマンのこの詩のなかに見ようとするときに、

Did Christ himself ever utter words more divinely human
to an erring one than those of Whitman —

Not till the sun excludes you do I exclude you,
Not till the waters refuse to glisten for you and the leaves
to rustle for you,do my words refuse to glisten and
rustle for you.

という表現があること[註10]、あるいは、このホイットマン理解に対して、"It is nothing but the beautiful little idyl of the New Testament-about the woman taken in adultery." という註がつけられていることが、その問いに対する一つの答えであろう。

さらに興味深いのは、この女性が、“Mary Magdalene”と呼ばれていることをあげることができるところである。[註11]

つまり、このホイットマン詩の読者は、明らかにこの〈prostitute〉のなかに、聖書のなかの女性である、〈姦淫の女〉であり〈罪の女〉を、象徴的な表現をもってすれば、マグダラのマリアを読み取ろうとしているということができるのである。

ところで、有島の作品についての、直接的な発言ではないが、“To a Common Prostitute”について、武田勝彦氏の興味深い指摘がある。

それは川端康成の「生命の樹」〔昭21〕についての発言であるが、武田氏はこの作品について、〈新生日本と戦争のために傷ついた啓子・寺村の第二の人生のスタートを主題としたきわめて明るい力強い作品であり〉、その背景にあるものが、ホイットマンの“To a Common Prostitute”だというのである。

〈死を眼前にして娼家に上つた寺村はあどけない姿の女に叫ぶ。／「名もない淫売婦に……〔下略〕〉。このホットマン詩の引用が、有島の訳からであるという指摘があるが、さらに興味深いのは、武田氏は、川端が、啓子に、「ヨハネによる福音書」第八章の七節の言葉〈罪なき者石もて……〉を自分の言葉として引用させていることにふれながら、この川端の作品が、構成的にもホイットマン詩をその背景において考えられているという指摘をしていることである。その根拠として、このホイットマン詩が、〈「ヨハネによる福音書」第八章一節――第十一節の変形として〉創作されたのだと云う、〈原詩に関して、一九六五年の脚注を付した厖大な七六八ページの『草の葉』を編集したブロジェット氏(Harold W.Blodgett)ブラッドレイ氏(Scully Bradley)〉の解説があることを明らかにされている。このことは、先にも触れたようにホイットマン詩の解釈の可能性―描かれている女性が、聖書のなかの女性たち、姦淫の女、罪の女、つまり、マグダラのマリアであることを―を考える手掛かりをより明確に示しているのである。

それだけではない。川端がホイットマン詩と聖書との関連を知っていたとすれば、〈古典の引用を主題の支柱とし、人物構成と引用句との調和を取ったこと〉は、〈すぐれた小説作法〉であり、その具体的な関係を知らなかったとすれば〈氏の西欧文学――聖書を含めて――の理解が非常に深いことにな〉り、それが〈芸術的インスピレーションとすれば、偉大なる芸術家は偉大なる芸術家を理解し、古典は永遠の生命を持っているまたとない立証が得られる〉という武田氏の川端理解は、有島理解のためにも、きわめて示唆に富んだ指摘であるということができるのである。[註12]

有島が、聖書のなかの女性のうち、とくに〈姦淫の女〉に対して特別の関心を抱いていたことについては、既に述べたところであるが、その女性像が有島の内部にあって同一人化されてマグダラのマリアとなるに及んで有島の女性像の完成を見ることができるとするならば、ホイットマンの思いと有島のそれとの本質における一致を見ることができるところでもあろう。[註13]

聖書の世界で、マグダラのマリアは、伝統的に、ひとりの女性の全的な歴史を持った存在として位置付けられている。そのことは、すでに「近代日本文学のなかのマリアたち」[註14]において述べたが、有

島のマグダラのマリア理解もまた、その聖書理解の伝統のなかにあったということを知ることができるのである。

＊

日記において〈Ego〉を語った数か月後の、同じ年の六月、札幌を訪問した有島は、かつてのメンバーである河内完治、末光績、足助素一、逢阪信吾、工藤光雄、武田茂とともに、〈土曜会〉の集会を催した。そのとき、有島は、

余ハ今日語ルニ約翰伝第八章ナル奸婬ニテ捕ヘラレシ婦人ノコトヲ以テシ、要之基督教ノ根本的思想は Love ニアリ、人ハ多ク Love ヲ説ケバ道徳ハ柔ニ偏シテ又為スナキモノタル可シト云ヘドモ、ソハ真ニ愛ノ真諦ニ達セザルモノヽ云フ所ノミ、基督ガナシ給ヒシ生涯ノ一片ヲ取リテ考フルニ若シ愛ヲ除カバ残ル所何物ゾヤ、残ル所ハ零ナリ、愛ニ励マサレズシテ起リシ凡テノ力ハ重力ニ反対シテ起サレシ力ノ如ク再ビ旧ノ位置ニ立返ラサルヽヲ以テ最後トナサル可キノミ、人ヲ鞭ツ力、人ヲ責ムル力、悉ク愛ヨリ出テヽ効果甫メテ見ル可キノミト云フカ如キ意味モテ語リヌ。

〔日記、明36・6・30〕

と、ふたたび、〈姦淫の女〉を語っている。

この度は基督の愛に力点が置かれていたようであるが、このことからも、有島が、存在論的にも、倫理的にも愛を求め、愛に根拠を置かねばならぬ存在であったことをよく示しているのである。そしてまた、有島のこの思いとホイットマンの詩とが十数年を経過してもなお、本質的に響き合うものをもっていたからこそ、エピグラフとして採用されたにちがいないのである。

この所に存在の根拠を見出すことができる限り、人間存在は本質的に否定的であっていいことになる。いや、むしろ、愛の根拠の確かさ故に、徹底的に否定的であるべきであるとさえ云えるのである。

有島が『或る女』広告文に記した、〈畏れる事なく醜にも邪にもぶつかつて見よう。その底には何があるか。若しその底に何もなかったら人生の可能は否定されなければならない。私は無力ながら敢へてこの冒険を企てた〉に関わる葉子の可能性についての議論に対する一つの答えを、エピグラフ詩は示唆しているということができるのではないだろうか。

三

詩のなかに〈姦淫の女〉、あるいはその象徴的な意味でのマグダラのマリアをうたっている詩人は数多く存在している。[註15] ホイットマンもその伝統のなかにあるひとりの詩人ということになるのであるが、キリストを思わせる者が、〈我が娘よ〉と呼び掛けているところに示されている愛は、ホイットマンの特色だと云うことができよう。

＊

はたして、有島がこのホイットマン詩のなかに直接的に、聖書の背景を見、マグダラのマリアの姿を垣間見ることができたか否かは疑問であるが、それがもし間接的であればなおのこと、有島の文学

と宗教との接点を女性像のなかに検証することができるところであり、有島の鋭い感受性を看取することができるところなのである。

ところで、日本の詩人のなかでこのホイットマン詩のように聖書の女性をうたっている詩について、いささか触れてみたいと思う。そして、有島との比較の一助にしてみたいと思う。

＊

ホイットマン詩の影響を受けた詩として、千家元麿の「捕はれた売春婦」[註16]を取り上げてみよう。

捕はれた売春婦は／捨鉢になつた度胸で／牢獄に眠つてゐる／彼女は自分が悪いとは思はない／彼女は警官を嘲り／社会を罵つている／剛愎な彼女は淋しく孤独で／社会を認めず／道徳を認めず／真実に生きてゐる／彼女は立派な虚無主義者である／私も又彼女の友である

千家元麿もまた、〈私はどうしてこんなに彼の肖像が私を喜ばせるかと／不審に思つたが／それは彼の姿の中に主基督の姿を見るのだと思つた〉（「ホイットマンの珍らしい肖像」）というように、ホイットマンのなかにキリストを見た詩人であった。だから、ホイットマンについてうたっている、

ホイットマンはいかなる人も拒まない／彼は最悪の罪人でも、淫売でも歌つてゐた／「俺と一緒に気楽になれ寛いで居れ／太陽が拒まない限り俺はお前を拒まない」と／ホイットマンは大きな手で握手を与へる／（「「昔の家」（続編）」）

という詩は、キリスト賛歌の一種の変形だということができるのである。

それに対して、〈姦淫の女〉のイメージは、いささか貧困である。〈虚無主義者〉という言葉に見られる居直りの姿勢がそうさせているのかもわからない。

直接、ホイットマンの影響を云うことはできないが、山村暮鳥の、「或る淫売婦におくる詩」[註17]もその一つではないだろうか。

女よ／おんみは此の世のはてに立つてゐる／おんみの道はつきてゐる／おんみはそれをしつてゐる／いまこそおんみはその美しかつた肉体を大地にかへす時だ／静かにその目をとぢて一切を忘れねばならぬ／おんみはいま何を考へてゐるか／おんみの無智の尊とさよ／おんみのくるしみ／それが世界の苦みであると知れ／ああそのくるしみによつて人間は救される／おんみは人間を救つた／おんみもそれですくはれた／どんなことでもおんみをおもへばなんでもなくなる／おんみが夜夜（よるよる）うす暗い街角に餓ゑつかれて小猫のやうにたたずんでゐた時／それをみて石を投げつけたものは誰か／あの野獣のやうな人達をなぐさむるために／年頃のその芳醇な肉体を／ああ何の憎しみもなく人人のするがままにまかせた／歯を喰ひしばつた刹那の淫楽／此の忍耐は立派である／何といふきよらかな霊魂（たましひ）をおんみはもつのか／おんみは彼等の罪によつ

て汚れない／彼等を憐め／その罪によつておんみを苦め／その罪によつておんみを滅ぼす／彼等はそれとも知らないのだ／彼等はおのが手を洗ふことすら知らないのだ／泥濘の中にて彼等のためにやさしくひらいた花のおんみ／どんなことでもつぶさに見たおんみ／うつくしいことみにくいこと／おんみはすべてをしりつくした／おんみの仕事はもう何一つ残つてゐない／晴晴とした心をおもち／自由であれ／寛大であれ／ひとしれずながしながしたなみだによつて／みよ神神しいまで澄んだその瞳／聖母摩利亜のやうな崇高さ／おんみは光りかがやいてゐるやうだ／おんみの前では自分の頭はおのづから垂れる／ああ地獄のゆりよ／おんみの行為は此の世をきよめた／おんみは人間の重荷をひとりで背負ひ／人人のかはりをつとめた／それだのに捨てられたのだ／ああ正しい／いたましい地獄の白百合／猫よ／おんみはこれから何処へ行かうとするのか／おんみの道はつきてゐる／おんみの肉体は腐りはじめた／大地よ／自分はなんにも言はない／此の接吻を真実のためにうけてくれ／ああ何でもしつてゐる大地／そして女よ／曽て彼等の讃美のまつただ中に立ちながら／ひとときのやすらかさもなかつた／おんみを蛆蟲はいま待つてゐるのだ／あらゆるものに永遠の生をあたへ／あらゆるものをきよむる大地／此の大地を信ぜよ／人間の罪の犠牲としておんみは死んでくださるか／自分はおんみを拝んでゐる／彼等はなんにもしらないのだ／わかりましたか／そして吾等の骨肉よ／いま一どこちらを向いて／おんみのあとにのこる世界をよくみておくれ

人間存在の否定性と、聖性とを、その存在のなかに両義性として担わされているマリアは、明らかにマグダラのマリアである。しかし、〈キリストよ／こんなことはあへてめづらしくもないのだが／けふも年若な婦人がわたしのところに来た／そしてどうしたら／聖書の中にかいてあるあの罪深い女のやうに／泥まみれなおん足をなみだで洗つて／黒い房房したこの髪の毛で／それを拭いてあげるやうなことができるかとたづねるのだ／わたしはちよつとこまつたが／斯う言つた／一人がくるしめばそれでいいのだ／それでみんな救はれるんだと／〔註18〕〔下略〕〉という暮鳥の視野には、彼女に、〈我が娘よ〉と呼び掛ける存在があったか否かは、はなはだ疑問である。あえて云えば、ここには、野末にひとり淋しく立つ女の孤独な姿しか見えないのではないだろうか。

あるいは、この女と、〈淫売婦〉との間にある差異を埋めることができる存在を求めて呻吟する暮鳥に、人間の苦難に充ちた現実を見なくてはならないのではないのかもわからない。

三好十郎の「マリア達〔註19〕」は、そのエピグラフ〈―マリア達互に言ひけるは『誰かわれらのために、墓の門より石を転し取るもの有らんか。そは、是の石、はなはだ巨大なればなり。』〉からも明らかなように、マグダラのマリアそのものである〔「マルコによる福音書」第一六章三～四節〕が、内容的には、まさに、〈あの日の翌々日〉、つまり、イエスの十字架上に死を遂げた日の二日後のことであり、復活の日の前日である〈その前日〉のマリアたちが描かれているのであって、復活のキリストとの出合は、希望として待望され

ているのであるが、しかし、今ここにある現実は、神不在の地上にうごめく女たちと、地下にあって不気味に〈唸るダイナモ〉の響きのなかに聞こえてくる喧噪との混沌だけなのである。

日曜！／あの日の翌々日だ！／上天気だ！／キラキラしてる。／空の方へ／市街は突き抜けてる。／ほこりの中を／道は跳ねてる。／地の底でダイナモは／ブルーンと唸る。／彼等は／その上をシヤナリ、クニヤリとねつて行く——／〔中略〕煙だ！／病院へ行くしやぐまの群！／風だ！／マリヤ達！／（地の底にはダイナモ）〔中略〕彼等はゾロゾロゾロ／白い建物の中に消える！／天にましますわれらの神よ！／は、は、は、は！あとには五月の日の光！／空に砂塵と風！／神は永久に天にゐます！／地上には／遊廓と病院とを つなぐ／真白な 一本の 道だけが、／ほこりを立てる！地の底には唸るダイナモだ！／上天気！／風！／その前日だ！

三好の、同じころに発表された戯曲「疵だらけのお秋」の主人公お秋が、ウインチに片腕をもぎ取られてしまった沖仲士阪井にとって、〈マグダラのマリアにほかならないのであ〉り、〈「マリア達」の娼婦群像図こそ、その先蹤だった[註20]〉のだと云う意見もあるが、問題はむしろ一人の女性が、いかにして新しい愛を獲得し得るかということであり、そのプロセスとともに、だれが彼女をしてマグダラのマリアたらしめるかということが問われるところである。その意味では三好の作品も、〈マリア達〉の〈娼婦性〉は、リアル描かれているが、〈その日〉をその日たらしめる存在が約束として描かれていないという意味で、印象はいささか曖昧だと云わなくてはならないのである。

四

若き日より有島が熱望した愛の実現を可能にするものが、ホイットマンによって示された愛の世界であったということは、有島にとって意味深いことである。

しかもそれが、〈姦淫の女〉—〈ベタニヤのマリア〉—〈マグダラのマリア〉という一連の女性像との関わりにおいて考察することのできる愛の問題として形象されているということは、改めて有島の内面に受容され定着している—もちろん有島なりの変容を見ることができることは云うまでもないことであるが—キリスト教の影響を考えるひとつの手掛かりとなることであり、換言すれば、愛の構造を考察する手掛かりでもあることを知ることができるのである。

それにしても、姦淫の女をして マグダラの マリアたらしめる存在、有島がホイットマン詩のなかに見た〈ワルト・ホイットマン〉は、有島の世界に、どのような姿をとって現れる可能性をもっているのであろう。

内田の来訪を期待しながら、葉子は死の床で喘いでいた。

内田が、内村鑑三をモデルにした人物であるということは、葉子の期待が虚しいものであることを物語っている。〈有島氏が今度為した事を善しと思ふ余の友人は此際断然余と絶交して欲しい。又余

の弟子と称する人、又は中央聖書研究会会員にして此事を是とする人は、今日直に師弟の関係を絶ち、又会員証を返して貰ひたい〔註21〕〉という言葉から察せられるように、義の人内村が有島を許すことはまずなさそうだからである。

しかし、一切のものが、見放したり、拒んだりしたとしても、自分だけは見放したり、拒んだりはしないという愛の人を待望している有島にとって、内田が、ともかくも一番それに近い存在であるかも知れないという期待を、葉子に持たせた事実は、葉子理解のために忘れてはならないことである。

内村の印象が強すぎると云うことであるならば、このあたりで、内村のイメージを消すことも必要なことであろう。内田をエビグラフの〈ワルト・ホイットマン〉に接近させることが、有島の創作意図に、ある意味では忠実な読み方ではないかと思われるからである。

翻って考えてみて、有島の内村に対する期待というものが、〈余ガ内村氏ニ学バントスル所ハ実ニソノ心志ニアリテ、其思想（少クトモ言論ニ顕ハレタル部分）ニ至リテハ全ク悦服スル能ハザル不幸ヲ有スルモノナリ〉〔日記、明31・7・15〕や、〈余ハ氏ノ持説ニ対シテハ遺憾ナガラ忝ク賛成ノ意ヲ表スル能ハザルモノナレドモ、氏ニ接スル時ニハ是等ノ疑問ハ何レニカ影ヲ潜メテ唯傾聴ノ余ヲ知ラザラシム〉〔同、明36・7・22〕というように、オーソドックスな教義にではなくむしろ、人間的な、破れの部分であったことが物語っているように、ということは、破れとして感じられる救いの可能性への共感であったと思われるのであるが、―おそらく、キリスト教で云うところの、救いの福音のもっている不合理性に通じるところだと思われる―内村が、有島のその期待に応える存在であったことは、彼の、有島への追悼文―「背教者としての有島武郎氏〔註22〕」が、よく物語っているように思われるのである。

内村のこの文章は、一面において弾劾文の趣を持ったものでもあるが、有島の否定的存在性が、人間存在のそれであることへの同情と共感をもって受けとめられていること、その文脈のなかで有島の苦悩を具体的に理解していたこと、とくに、〈有島君の棄教の結果として、彼の心中深き所に大いなる空虚が出来た。彼は此空虚を充すべく苦心した。彼は神に依らず、キリスト其他の所謂神の人に依らずして自分の力で此空虚を充たさんとした〉、には、有島が葉子像を通して描いた人間存在の根本的苦悩が、有島の内面性の表現であったことをみごとに言い当てていることを見ることができるのである。

信仰を捨てた有島にとって、宗教的言辞は無用のものだったにちがいない。しかし、信仰を通して教えられた愛は、彼自身の言葉として魂に定着していたことを、姦淫の女のエピソードを下敷にしてできているホイットマン詩の解釈を通して知ることができるのである。そのメカニズムが、つまり、内村―内田―ワルト・ホイットマンという変化が、「或る女」を通して表現されているのではないかということが、ひとつの可能性として考えられるのではないかと思われるのである。

〈有島の側にずいぶん引きつけられた期待〉と云うことについて考えてみたことになるのであるが、このことに関しては、さらに、

考え続けなくてはならない課題のひとつであるが、今は、紙幅の関係で、後考に譲りたいと思う。

＊　＊　＊

以上述べてきたことは、既に述べた「或る女」論で得た一応の結論の再確認の域を出ることができなかったようであるが、エピグラフとして取り上げられているホイットマン詩の新しい読み方を求めて、さらに考察を進めなくてはならないところである。

【註】

(1)・(4)　「『或る女』論㈣―キリスト教との関係について―」〔『有島武郎の文学』昭49・6　桜楓社刊所収〕

(2)・(13)　「『或る女』論㈠―田鶴子と〈Ego〉―」、㈡―「田鶴子と〈poetic woman〉―」〔同前〕、「作家と日記―有島武郎の場合―」〔梅光女学院大学公開講座編集第一七集『日記と文学』昭60・6　笠間書院刊所収〕

(3)　「『聖餐』論―椎名麟三『マグダラのマリア』との比較を中心に―」、『三部曲』論〔同前〕

(5)　有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐって㈥―〔「梅光女学院大学日本文学研究」一六号　昭55・11〕

(6)　河野一郎『世界詩人全集6　ポー・ホイットマン詩集』訳註　昭43・12　新潮社刊所収

(7)　鈴木鎮平「1　講演筆記『ホイットマンに就いて』をめぐって」〔『有島武郎におけるホイットマンの相貌』昭57・6　明治書院刊所収

(8)　「有島武郎とホイットマン」〔『近代文学におけるホイットマンの運命』昭45・3　研究社刊所収〕

(9)　岩波文庫版『或る女』解説　昭25・9

(10)　Clara Barrus:Whitman and Burroughs Comrades Kennikat press. 1931

(11)　Henry Soidel Canby:Walt Whitman an American Greenwood press 1943

(12)　「川端作品とホイットマン」〔「解釈と鑑賞」昭47・6〕

(14)・(15)　梅光女学院大学「キリスト教文化」第六号　昭55・3

(16)　『炎天』（大11・8）所収

(17)・(18)　『風は草木にささやいた』（大7・11）所収

(19)　『新興文学全集第十巻』昭4　所収〔初出誌不明〕

(20)　野村喬「〈疵だらけのお秋〉のお秋」〔「国文学」昭44・10臨時増刊号〕

(21)　「日々の生涯」〔大12・7・10〕

(22)　「万朝報」〔大12・7・19、20、21〕